

## 世紀転換期ウィーンの芸術における「神経」の射程

—グスタフ・クリムトの作品とその批評を通して

福間加代子 (京都大学)

---

「神経 (Nerv)」は、世紀転換期に一世を風靡した言葉である。「神経」という言葉の背景にあるのは、産業化が急激に進んだ結果生まれた病的現象、すなわち現代的な病として定義付けられた神経衰弱だと考えられる。「神経」への熱狂は、世紀転換期を迎えたウィーンにも広まっていた。ウィーンにおいて、「神経」を創作活動の文脈に取り込んだのは、批評家ヘルマン・バル (1863-1934) である。彼は「自然主義の克服」(1891) において、「神経」を病という否定的な存在としてではなく、自然主義からの脱却を図る鍵として肯定的に高く評価した。その三年後に著した「頹廢」において、彼は「神経」と芸術との間にある関係について更なる論を展開している。

本発表ではまず、当時の言説を再構成することで、世紀転換期ウィーンにおいて「神経」という言葉が芸術の文脈でどのように意味付けられていたのかを跡付け、「神経芸術」に再検討を加える。ミヒャエル・ヴォルプスによれば、バルの「神経芸術」が指し示しているのは、19世紀末のロマン主義復興に際して、アルトゥル・シュニッツラー (1862-1931) やフーゴ・フォン・ホーフマンスタール (1874-1929) が、自然主義を「克服」するために用いた方法であり、その方法とは、自然主義の手法を内的世界の描写に転用するものだという。ところが、「自然主義の克服」においてバルは、「神経」により構成される理想主義の先駆けを画家にも読み取っていた。

「神経」、さらには「神経芸術」の絵画への応用を読み解く上で主要な考察対象とするのは、グスタフ・クリムト (1862-1918) が描いた女性肖像画である。なぜなら、当時の批評のなかで、彼の描く女性肖像画は、「神経」という言葉としばしば結び付けられていたからである。しかしながら、当のクリムトは1909年、自然主義を重要視する発言を行っている。友人の画家カール・モルとともに書き記したポストカードに記された一文がそれである。「神経」と結び付けられながらも、バル曰く、「神経」によって乗り越えられたはずの自然主義を擁護したクリムトの作品を考察対象とすることで、絵画における「神経芸術」の射程を明確にできるであろう。内的世界の創造を促す「神経」は、結局のところ、外的世界を写す自然主義に完全に打ち勝つことはできなかつたのである。

本発表は、世紀転換期ウィーンの言説で頻繁に言及されるにもかかわらず、これまで詳細に論じられることのなかった「神経」および「神経芸術」の意味を再検討し、その絵画における実践を明らかにすることを目的とする。